

「コンジキヤシャ」篤彦は声を出して読んでみた。二、三日前、好恵に教えてもらったばかりだった。その日、たまたま買い物帰りの夕希ちゃんが、そこを通りかかり話しかけてきたのだ。

「ねえさん、ウチ、この映画みたいわ。天然色の映画いうとったなあ。けど、金色夜叉ゆーて何なん？」

「お金の亡者らしいで。映画を観んことにはな。一緒に行ってみるえ」「もちろんやわ」看板を見上げていた篤彦は、二人の立ち話がそこまでいったとき、「ぼくも見たい」と割り込まずにいらなかったのだ。

「子どもが見る映画やないがな。アツがよう見よるチャンバラとはちがうんで」観ている映画を、みんなチャンバラにされたのは面白くなかったが、ここで怒るのはまずい。他の映画なら一人でも行けるが、「金色夜叉」だけは大人がいないと入れないと思ひ、篤彦は食い下がった。

「ええがな、姉さん、明日はアツちゃんとながりに行くことになつとるし、帰りに映画にも行けるやない」

夕希ちゃんのおっとりした説得に好恵はおれた。コンジキヤシャには、今まで見てきた映画にはない何かがあるに違いない。

篤彦は、祖父の栄三郎が納屋の横に作った部屋に母と二人で暮らしている。母屋には、妻を早くなくした栄三郎と、農作物を作っている長男夫婦が住んでいた。祖父は、春先、竹やぶ下の畑で倒れていたところを担ぎこまれ、そのまま寝ついた。中風で右手足がほとんど動かないので、好恵がぎおんの仕事のかたわら面倒みている。

金子座から戻ると、篤彦は流しとプロパンガスのある狭い出入口に鞆を投げだし、

母屋おもやに行った。縁側えんがわ越しに松まつの木と田圃たんぼの見える座敷ざしきが、祖父そふのお氣きに入りだ。

枕元まくらもとで薄いブルーの扇風機せんふうきが光ひかっている。その光沢こうたくと色合いろあいは、赤茶あかちゃけた畳たたみや、くすんだ壁かべにかかる古い柱ふるはしら時計とけいにひどく不似合ふにあいだ。

夏なつまえ、栄三郎えいざぶろうが自力じりきでは立ち上あがれなくなったとき、息子むすこは「お父とうはん、なんぞ欲ほしいもんがあったら言うてご」ときいた。

「プロペラで風かぜを作る扇風機せんふうきたらいうもんに当たあってみたい」といった言葉ことばに答こたえて買かってもらったものだ。風かぜの凧なぐ夕方ゆうがた、枕元まくらもとでうちわの風かぜを送おくっていた篤彦あつひこの仕事しごとは、電源でんげんと風調整かぜちようせいのスイッチきの切り替かえにかわった。

祖父そふのところには、今日きょうも隣となりの為ためやんが来きていた。開あけ放はなたれた障子戸しょうじどの前まえの縁台えんたいから、奥おくに向むかってぼそぼそと昔話むかしばなしをしあっている。扇風機せんふうきのスイッチきを入れいると、部屋へやの隅すみに半分はんぶんたんだままぶら下がさっていた蚊帳かやの裾すそがゆれ始はじめた。為ためやんは枕元まくらもとに呼よばれしばらく一緒いっしょに風かぜにあたあった。祖父そふの昔むかしなじみが帰かえるのを待まって、篤彦あつひこは話はなしかけた。

「爺じいちゃん、明日あした、蛍ほたるを見みせてあげあげい。母かあちゃんと夕ゆき希きちゃんとで取とりに行いくきに」

「田植たうえもすんだし、蛍ほたるはもうおりまいが」

「ひだらい橋はしの用水ようすいの所ところでいっばい飛とびよるんをぎおんに来きよるお客きやくさんが見みたそうや」

「沢山よおけ、おおつたらええのお……」そう言いいかけたまま、祖父そふはもうウトウトしている。

水曜日すいようびになった。

ぎおんの休日きゅうじつだ。エプロンはすを外はずし、普段ふだん着ぎにななった好よし恵えは嬉うれしそうだ。早はやい夕ゆ食しやく

をすますと、夕希ちゃんと自転車を二台並べてひだらい橋に向かって県道を上った。篤彦は、夕希ちゃんの荷台に乗るのは久しぶりだった。ふとタケシと守のことが頭をよぎった。こんなところを見られたくない。二人の家は川のずっと下流だし、この時間に顔を合わせることはないのだが、夕希ちゃんの自転車に乗せられていると、抜けがけをしているような気分がしてちよっと胸が痛くなる。

ひだらい橋は財田川の上流にある橋だ。着くと、欄干の影がもう長くのびている。篤彦は自転車から降りしてもらい、川の上流を眺めた。左は知行寺山の山裾が川縁までせまり、右も川岸近くまでうっそうと伸びた雑木が連なっている。V字型に狭められた空の底に、財田川のほの暗い水面があった。

蛭が出はじめるまで、まだ間がある。二人の間に立ち、何か言わなくてはいいないと思つた篤彦は、ひだらい橋の謂れを話し始めた。

「戦国時代、高知県の長宗我部元親いう大名の家来がこの辺まで大勢、攻めて来たそうや。そんなとき、讃岐の勇敢な武士がこの知行寺山に小さな砦を建てて立てこもつて、最後まで戦こうた。その武士たちの流した血で、川が血のたらいみたいになつて……」

そこまで話したとき、夕希ちゃんが泣きそうな声を上げた。「うわー、アッちゃん、そんな恐ろしげな話せんといて、蛭見んうちに帰りとうなるやない。なあ、姉さん」

「どうせ、またお爺ちゃんの受け売りやろ。気安げに、そんな話しよつたら死んだ侍の霊が寄って来るんで。ほれ、恨めしやー」

おどける振りをした好恵に夕希ちゃんは悲鳴を上げ、それにつられて篤彦も

逃げだした。人気の途絶えかけた橋の上を、三人は声をあげて駆けまわった。

「こんなん笑うたの久しぶりや……」

ひとしきり騒いだ後で、夕希ちゃんがしみじみとした口調で言った。

「さあ行こ。そろそろ暗うなってきたで」

篤彦は先頭に立って、橋のたもとから川沿いの細道を上流へ歩いた。足の下で魚の跳ねる音がする。灌木の茂みや川面でよどんでいる湿った空気に、川の水や水底の藻に山の緑が混じりあった濃い匂いがあった。大きな茂みを越えたとき、夕希ちゃんが声を上げた。

「あつ、蛍、おる、あそこや」

指さす川面に光の弧がみえた。小さい弧や大きい弧がそここで点滅している。

「ほんま、こんなにいっぱいおったんやな」

「あそこ、二匹が続いって綺麗やわあ」

好恵は、足下から目の前に舞い上がってきた蛍を両手で器用につかまえ、夕希ちゃんに差し出した。

「蛍、光つとるのに熱うはないな」

「けど、姉さん、心は燃えとるんよ。蛍の光いうて求愛のしるしなんやて。雌の方から合図を送るそうや。店に来る頭のええ人がゆうとった」

夕希ちゃんは独り言のように言った。

「え、キューアイ、英語みたいやなあ」

篤彦が意味を訊くと、答える代わりに額をこぶしでこづかれた。柔らかな感触だった。何回でもこづかれないと思った。

好恵が水辺に手を伸ばして取った蛍草を籠に入れ、夕希ちゃんが手の中の蛍をいれると、青白い光がまわりの闇に映えた。

向かいの雑木林の上に半月が昇っている。

「あつ、金色夜叉に遅れてしまう」

夕希ちゃんの言葉に、電信柱に明かりのともった県道をぎおんまで飛ばした。

二人に、金子座の前で待っていてくれるように頼むと、篤彦は蛍籠を持って祖父の枕元に急いだ。

隣の部屋では叔父夫婦が食事をしていた。

かすかな寝息が聞こえる。吊るされていた蚊帳の中に蛍を放すと、青い麻の上に黄色い光の弧が幾つも浮かんだ。篤彦の気配に眠りかけていた祖父が目を醒ました。

「おお、綺麗のお。本当に綺麗のお。小んまいのに、わが身もやして飛んびよるが」

祖父は小声でくり返した。

「爺ちゃん、よーに見とりや」

篤彦には、そのか細い明かりが、栄三郎の残された命のように思えてならなかった。

金子座に着くと、看板を照らす明かりの中に男と女が浮き出ている。「金色夜叉」は始まったところだった。好恵と夕希ちゃんは、時々、体をモゾモゾさせながら、食い入るように画面をみている。学生と日本髪の女と違う人物ばかりが出てきて訳がわからなかった。しばらくして、看板の男と女が映し出された。男が激しくのしり、女は追いつがった。

「これがキューアイというものなのか？」

ひしひしとしたシーンに篤彦はそう思った。それが終わったとき、男は学生服で
はなかった。火事で燃えていく家で、炎の中の札束を必死の形相でつかもうとし
ている男と、安物の青いペンキを塗りたくったような池か沼の中に入って死のうと
する女がいた。今まで味わったことのない思いに突き動かされていた。

そして、篤彦はなぜかオレンジ色の炎の色に蛍を思いだし、一人家に帰った。痰
の絡むような寝息をたてて眠っている祖父の枕元に落ちた蛍が、そのまま小さな
光を灯し続けている。篤彦はそれをそっと拾うと庭に放った。

(以上8月29日放送分)